

五十四 園丁と蝶の対話 「認識と言語を巡って」その四

莊周 やあお久しぶり。わたしたちの問答はとどこおっていますね。カントの認識論をさらに議論することが君に無理なら、基礎的なことは一応できたとして、話題を切り換えてみませんか。君は最近出た哲学の書物を読んだようですから、その話をしてみようじやありませんか。

園丁 ああ、あれですか。Q・メイヤスーという人の『有限性の後で』という本です。あなたとお話するのに、種切れにならないようにこつそり勉強しようとしたのですよ。なにしろ、「思弁的実在論」を提出したというのですから。フランスの最新思想として評判だと漏れ聞くと、実際、表題がある達成をほのめかしていますからね。ところが、僕はこの書物を受けとめることができませんでした。あなたをつまらない議論に引きこむことになりそうですが、かまいませんか？。

莊周 うん。わたしたちはお互いの夢に出る蝶と園丁ですよ。二人の対話が失敗しても、だれにも恥じることはありません。懸命に考えることは君の足しになるでしょう。そのくらいの覚悟でわたしはお相手をしているのです。

D カントの認識論から超越しないように

園丁 じつのところ、『有限性の後で』は、納得できるところが少なく、第一章で中断してしまいました。カントの文章を読み進むのは楽ではありませんが、批判の方法には論理的であろうとする姿勢が貫かれていますので追いかけることができます。ところが、フランスのポストモダン思想のなかで育ったせいでしょうか、メイヤスーさんは言葉を精度よくつないで論理を整理することをあまり気にかけていないように感じました。僕は人の話に筋が通っていれば説得されやすいのですが、この書物の場合、重要そうな文章に線を引いてみても、さてその意味はと考えるとどうも疑問に感じる文が多いのです。というわけで、それらの文章にたくさんの疑問符をつけていくことになりました。

第一章は、人間の認識についてデカルト以来の考察をふり返り、カントとそれ以後の主流の考え方を「相関主義」と呼びます。その相関主義は、主体との関係から分離された対象それ自体を把握することはできないとし、さらに、主体はつねにすでに対象との関係に置かれていますのでそうでない主体を把握することはできないと主張する、つまり、主観性と客観性の領域をそれぞれ独立に考えることを無効にする、と要約します。

荘周 その整理の仕方を君は否定するのですか？。

園丁 いいえ、最初の文「主体との関係から分離された対象それ自体を把握することはできない」はカントの言葉「物自体は知られない」に対応し、「主観性と客観性の領域をそれぞれ独立に考えない」というのはカントがデカルトの二元論を越えるために採用した立場だ、と思います。でも僕は、前回議論したように、カントは対象にあくまで接近していくことを放棄したのではないと考えますし、進化論に近い考察をしたカントは、主体にだって可能な限り迫っていく立場だと考えます。この書物の言い方は、論を立てるための意図を含んでいて、強すぎると思います。

園丁 そのように言い取っておいて、メイヤスーさんは、主観性と客観性の領域をそれぞれ独立に考えることができないことに反対するのです。「人間のいない世界、現出に関係しない物や出来事で満ちた世界、世界への関係と相関しない世界、こうした世界が数学的言説によって記述可能なのはどうしてか」と問い、さらに、「人間どころか生命も存在しない過去について推論できる能力はいったい何なのか」、と問います。そしてそれを、「いかなる条件において、近現代の科学における祖先以前の言明を正当化できるのか」、と再定式化します。

彼は「これは超越論的な問いだが、第一条件としての超越論的なものを放棄している」

と言います。数学の援護を受けているからと考えているのでしょうか。しかし、「祖先以前性」と名づけられた第一章は、次のような文章でしめくくられます。すなわち、原化石（祖先以前性）は、「自己自身の外に出ること、即自を捉えること、私たちがいようがいまいが存在するものを知ること」へ導く、と。この少しずつの文章の移行には、微妙な論理の飛躍がひそんでいると僕は考えます。命題の重要さを保証するのは、その言明と一体の拘束条件です。彼の整理した文章は、超越を戒め批判の精神を忘れずに事物を考えるときには意味をもちえるでしょう。それを忘れれば、最後の文章は、「超越論的」というよりもすでに超越しつつあるのではないのでしょうか。この書物の論理展開はおかしいと思いました。それで、第二章以後へ読み進むのをやめたのです。

莊周 おやおや、君にしてはずいぶん大胆な態度ですね。

園丁 はい、ここはゴータマのように断念する場面だと思っただけです。もつと考えるべきところだったでしょうが、それのできない僕は自分の直観を信じたのです。

園丁 科学的言説に満ちた現代に育ったメイヤスーさんは、哲学の道に入って彼の言う「相関主義」がそこを占領していることに不満だったのではないのでしょうか。そこで、彼には疑いようのない「祖先以前性」を対立概念として立てて、人間無しで実在がある

ことを「論証」しようとしている、と僕には見えます。これは、哲学の素養のない者の浅はかな見方かもしれません。でも、人間さらに生物の登場以前という概念は、まぎれもなく科学が発展して得られた知見です。ところで、科学というのは、科学論を緻密にしたポパーも認めているように、カントがほぼ完成した認識論を建設したことによって確実になった営みだと思えます。科学は、カントの認識論の延長上にあるのです。

科学は、経験的な検証によって認識を深め、確実な知見に至る営みです。「科学における祖先以前の言明を正当化できる条件」は、この営みを続けるところ以外にはありません。人間は、人工物のある天体に到達させるように計算し、地球から打ち出して事実到達させ、七年後に帰還させてその天体の塵を手にししました。その延長上で、わたしたちは、生命が発生する以前の地球はおおよそ科学の教えるようであつただろうと考えます。そのとき、わたしたちは地球が実在したことを疑っているでしょうか。人間はこの世界で経験的実在論者としてあるのです。それに満足せず、実在について科学的知見を超えて知ることが必要でしょうか。それは可能でしょうか。経験の範囲にとどまる限りそれには限界がある、というのが理性の教えるところです。

それなのにメイヤスーさんは、「祖先以前の実在」という概念（それは経験にかかわらないようですからカントの言い方だと理念だと思えますが）を措定して、「自己自身

の外に出ること、即自を捉えること、私たちがいようがいまいが存在するものを知ること」へ踏み出して、そこから思惟だけによって世界を觀ようとするのです。これはまさしくカントの言う超越だと思えます。科学の知見は、こちら側に踏みとどまることによって維持できるのです。科学の知見を外挿して向こう側で受けとり認識論の構えを逆転させるのは方法の誤りです（僕は、あなたに注意を受けましたが、踏み越えはしなかつたと思えます）。この「思弁的実在論」は認識論に矛盾すると思えます。

莊周 君はめずらしく判断を実行しましたね。わたしたちの貧弱な問答から出たその判断は大丈夫でしょうか？。

園丁 ああ、莊周さん、僕はあなたの支持を得たいのですよ。

莊周 一つ耳よりの情報はあります。講談社の小冊子『本二月号』で、日本の竹田青嗣さんがメイヤスの思弁的実在論に対して、「メイヤスの思弁的実在論は、哲学的には（認識論的には）はつきりと批判されねばならない」と言っていますよ。哲学を仕事としている人の判定ですから、君はそれほど間違つてはいないでしょう。

*

園丁 あれから竹田さんの論考を見たら、「『有限性の後で』は、ポストモダンの批判思想の長い席卷の後によりやく到来した、社会批判の正当性と根拠を求める新しい思想世代の登場を象徴している」、と肯定的なとらえ方をしていますよ。「なんらかの絶対的なものの存在を論証することで、社会批判の正当性の新しい根拠を作り出そうとする動機は、思想的にきわめて真摯かつ不可欠なものである」、とも言います。哲学に従事する人は、こういう考え方をするのですね。

庄周 西洋流の哲学の徒は今でも何か絶対的なものを求めようとしていますね。わたしたちはそういう伝統がないのでそこまできかないけれど、そういう姿勢に意味があるのかもしれません。そうだととしても、「社会批判の正当性の新しい根拠」を思弁だけでつくり出すのはたいへん困難だろうと思います。西洋には、マルクスのように、「哲学は世界を解釈してきたただけだ、問題は世界を変えることなのに」、と言った人もいます。現に、フランスには思弁的考察に励む人たちが多いいけれど、ドイツではもう少し具体的な社会問題を論じる傾向がありますね。

園丁 僕も漠然とそんな感じをもっていました。ポパーの反証可能な命題だけが形而上学に陥らずにすむという主旨の主張を読んで、社会的な問題を考えるのに頭の中にとどまっただけではいけないという考えを強くしました。社会科学というときには対象がある

わけですから、対象を具体的に考えるべきなのだと思います。もともと、「社会問題のうち、普遍的なものの根拠を見出そうとする試み、それを従来の形而上的な超越項の設定でない仕方で見出そうとする思想の努力は、この上なく正しい」とする竹田さんの主張を退ける論証の力が僕にあるわけではありません。

庄周 人間理性の本来的なあり方からして、人文学ではいつも根源的に考えようとする傾向が避けられません。蝶のわたしでさえさまざまに夢想するのですから、人間の思考は尽きません。『莊子』の流儀にないけれどちよつと気取っていえば、生きるとは人間を問いつけることだと思えてきます。

園丁 ああ、それで思い出しました。最近、ウイトゲンシュタインの『ラスト・ライティングス』を手にしました。あの人は、二十世紀前半に、社会科学や人文学へ向かわずに哲学的考察を続けました。竹田さんは、彼の思考がつながる分析哲学を、「人間社会における普遍的なものの間主観的な認識可能性の根拠づけ」に関心をはらわないとして、批判しているようですが。

いずれにしても、ウイトゲンシュタインが書きとめたものを読めば、どういう理論的立場に立つかにかかわらず、人間という存在をあれこれ考えさせられることになります。

だから、これらの断章は哲学なのでしょう。

莊周 読み通せましたか？。

園丁 一つ一つは短い文なので一応考えます。しかし、どう答えていいか分からないので、問い詰められたまま次の文章に進むことになってしまいます。人間を「言語ゲーム」としてとらえた人が日々考え続けて、その問いを記録していくのに、一つの問いをまた別の角度から考えなおし、問いは新しい問いとなり、……どこまでも続いていきますね。彼の問答は、禅問答のようなところがありますが、どこかで一つの言葉でからめとって決着をつけようとはしません。問いは続くわけです。

園丁 ここでは、人間にまつわるあらゆる事象が考察されます。とりとめもなく挙げてみれば、人間の心的状態に関連して態度、身振り、表情、声、……、また、アスペクトの閃きという言葉に関連して感覚、知覚、……といったぐあいですが、僕のような貧弱な者には整理がつきません。この連続する問いは、人間の事象を精確に理解することがどんなに困難かを示すためにあるかのようです。そして、それと切り離せずに結びついて、やはり窮め尽くせぬ言語の複雑さが浮かび上がります。ですから、今僕たちが考えようとしている認識と言語の問題が多面的に考察されているわけです。

さまざまな断章の中には、「哲学とは言語使用の記述ではないが、それでも、言語において生活が言い表される仕方すべてに絶えず注意を払うことによって、人は哲学を学ぶことができる」というような言葉があつて、ウイトゲンシュタインの考察がそれを実行していることを教えます。「ある生活パターンがある言葉の使用の基礎になっているとすれば、(生活パターンは厳密な規則性ではないから)、その使用には不確定性が存在する」ことになります。「アスペクトを見ることは意志行為である」や「視覚的な知覚だつて意志に依存している」という言葉が、意志も考察の射程にあることを言っています。また、「私がアスペクトの閃きにおいて知覚するのは、対象の性質ではない。それは、その対象と他の諸々の対象との内的関係である」と言います。認識が対象そのものよりも「関係」に向かうという見解が僕の注意をひきました。

莊周 あえぎながら語っているように見えますが、ここでウイトゲンシュタインを話題にしたのはまずかつたのではないですか？

園丁 つながりがあると思つてそうしたのですが、たしかにそうですね。僕にはまとまりがつかないので、恣意的で乱雑なことになります。目にとまつたことに触れておきましょう。

どこだったか、「我々の課題は因果関係にまつわるものではなく、概念にまつわるも

のである」という言葉がありました。そのあたりには、見る、認識する、視覚体験、態度、……と、認知にかかわることの考察が続きます。そして、「考えることと、頭のなかで語るとは、異なる概念である」という命題も出ます。人間の思考は言葉になる前に頭で語ることとも違うというわけですから、認識が複雑な作用だということになります。認識が言葉になるについては、「我々の言語はまず像を記述する……」と、カントの言う表象が登場し、それが概念にまで整理される過程は、すべての断章が関係するといってもよいわけで、言語についても、「言語の論理は、見かけよりもずっと、計り知れないほど複雑である」ということになります。しかも、言語を考えるにも、「人間の最も細かく区別された振る舞いととは、もしかしたら、声のトーンと顔の仕草とが伴った言語かもしれない」と、たいへん微妙なところまで分け入ります。

認識と言語に関して考察は、人間の振る舞い全体に及ぶのです。すると、「心をもつ者には、痛む、喜ぶ、苦悩する等々の能力がなくてはならない。それに加えて、記憶する能力や決意する能力、何かを計画する能力もあるべきだとすれば、言語的な表現がそこに必要である」というように、認識と言語は切り離せないものになります。しかも、「内面で生じていることも、生活の流れのなかではじめて意味をもつ」と言って、考察は単に思弁にとどまりません。「内面の像は、色とかたちと、おまけに特定の体制をも

つ」とすれば、具体的な身心のあり方まで対象になります。実際、「高等動物の進化と人間の進化。ある特定の段階での精神の目覚め、意識の目覚め」に注目していますから、認識や意識を進化論的に生物学的に考察すべきだと考えているのです。それに関連して、「何よりもありそうに思われることは、個々の考えや個々の想像ないし記憶に対応するようないかなるコピ―も生理学的なものや神経系には存在しない、という明確な見解に人々がいつか至ることだ」と言っています。自分の考察に基づいて、脳の中の神経系の作用についてまで予測しようとしています。僕たちは、認識や言語について、可能ならそういったことまで考えなければならぬのです。

莊周 たいへんなことになりましたね。わたしたちの問答は収拾がつかえますか。

園丁 とてもとても。どこかで切り上げざるをえません。

ですが、ワイトゲンシュタインは、問いを続けっぱなしでおしまいにしているわけではないと思います。たとえば、「経験命題の特徴を備えながら、私には真であることを疑う余地がない命題がいろいろと存在するように思われる。すなわち、私がそれらを偽と仮定してしまうと、自分の判断すべてに不信を抱かねばならなくなるような、そうした命題が存在するように思われる」としていますから、あれらの考察はそういうものを

見出すためにあると言うことができます。また、「しかじかのことが出来る人、しかじかのことを学んで習熟している人についてだけ、その人がある体験をしていると言うことに意味がある」とも表明していますから、僕たちの対話はそういうことのための予習であると考えたいと思います。

庄周　ところで、君は先ほど、メイヤスーさんが「祖先以前性」という言葉で実在を定立しようとしたことを批判しましたが、ワイトゲンシュタインはそれを次のように言っています。——「地球は本当に君が生まれる前から存在していたのか」という問いに対して我々は、苛立ちと困惑とを滲ませつつ、「もちろん、当たり前だ！」と答えるだろう。そして、その際に我々は、一方ではその根拠を挙げることに到底できないことを自覚している。なぜなら、挙げるべき根拠があまりに多過ぎるように思われるからである。また、他方で我々は、自分の生まれる前から地球が存在していたことが少しも疑いえないことを自覚している。ひとつの特別な教示によって質問者に答えることなど到底できず、むしろ可能なのは、世界に対して我々がもっている像を徐々に教えていくことによって答えることだと、我々は自覚しているのである——と。ワイトゲンシュタインはあれほど問いを続けたのだけれど、経験や実在に関して超越を敢行しはしなかったのです。だから、科学の側に立って世界を観ようとする君の立場を支持してくれそうです。

*

園丁 さて、人間の心について考えていけば思惟は果てしなく続くことが分かったので、ウイトゲンシュタインを研究してきた永井均さんという人もそういうタイプの一人です。雑誌でその文章を読んだことがあって、独自の言葉づかいで思弁を繰り広げる人と知っていました。最近、『なぜ意識は実在しないのか』という書物の改訂版が出たことに気づいて取り寄せました。

莊周 おや、まだ、やっかいな議論を続けるつもりですか？。

園丁 もともと手に余る主題に首を突っこんで、引っこみがつかなくなっているんです。助けてください。明快な主張の表題に誘われて読む気になったのです。でも、ただ好みの主張を受けとって満足したのではなく、表題に現われている全体の論旨を僕なりによく考えて、それを肯定できると結論したのです。僕の漠然とした考えを哲学者が補強してくれたと思います。あの人の文体は僕にはむずかしく、また、もたもたすることにありますが、少しでも踏みこんで考えなければ意味がないでしょう。

莊周 はいはい、おつきあいしてみましよう。

園丁 永井さんは、心的なものとの物的なものとの関係を問題にすることがなぜ可能なのか、と問い始めます。そして、「私を感じているのは私の心だけです。私は確かにそれが存在すると思います。しかし《自分》なんて一般的なものの存在はまったく知りません」と表明します。永井さんの基本的な命題は、わたしはわたし（の心）しか知らない、というものです。「それなのにどうして心なんて一般的なものがあると、誰もが信じているのか」ということを解明するのが、この書物の第一の課題だと言います。

現代の哲学者は心を考えるのに脳を持ち出さざるをえません。しかし、「脳が意識を生み出しているとしても、その脳をどんなによく観察しても、その脳がやっているその仕事は決して見えません。∴脳がしている仕事を見るには、脳を観察しないで、脳自身に注意を向けなくて、むしろ世界を見なければならぬ。∴∴∴脳と意識の関係は、他のどんな関係にも似ていない」、と断じます。この判断は、脳科学の研究が行なわれているのを知った上でのものでしょう。そうすると、「何にも似ていない事柄については、説明ということが成り立ちません」。僕のような者は、ここで立ち往生するほかに術がない。でも哲学者はそうしているわけにいきません。永井さんは、彼一流の文体でその困難な仕事に取り組むのです。そこには、ウィトゲンシュタインが考えたように、感覚や知覚∴、物理的事実∴、世界の識別、対象の認識∴、言語∴、そのほか諸々について

の考察があります。竹田さんの議論に関係する間主観的連関や主観的認知といった言葉も出てきます。ですが、その内容を誤りなく話すことは僕には困難です。

荘周 やっぱり困りましたね。夢に出るわたしたちには苦勞が多い。けれども、永井さんのあの書物は、「意識は实在（事物）ではない」という君の言う唯物論的な判断を下すについて、D・チャーマーズという人の主張に対決して論じ、わたしたちを啓発してくれますね。その人は、「物理的に私と同一でありながら、意識体験がない生き物——私のゾンビ複製体——が可能である」と論じ、「世界の中に物理的性質に尽きない何か別のものがある」と断じるのだそうです。生物学者はキメラを考えるにしても生きています。科学の時代を考えるのですが、哲学者は死んだまま甦るゾンビさえ考察するのです。科学の時代と思われている現代、世界の哲学界にこの種の「心の哲学」分野があつて、そのような議論をする人がいるというのは意外でした。

園丁 この人は結局、唯物論を否定する論証をしようとするのですね。僕はまごつきません。メイヤスーさんのように唯物論をすつきり単純化した人があるかと思えば、このチャーマーズさんのように唯物論を超えたい人もいるのです。ここまでの僕の考察からして、この両極端に同意できません。永井さんも、「世界の中に物理的性質に尽きない何か別

のものがあるなどという発想は、あまりに単純で貧寒な発想」と言っています。永井さんよりも世代の若い哲学者たちに発想の異なる人たちがいるということなのでしょう。僕は永井さんと同じ世代ですから、過去の哲学者たちの営為をそのように簡単に脇においてまったく新しい論を立てるのに首をかしげます。下手に言い取るとまた莊周さんにしかられそうですが、哲学といえどもその時代の思潮に影響されるという歴史の真理を見たような気がします。

莊周 わたしもおかしいと思います。わたしは、自然と人間の事象を観察して智慧を得ようと思しますが、そのようなとらえ方はしません。

*

園丁 もう一度元に戻って、意識あるいは心について考えをまとめておきたいと思います。前回、「われわれは、自身の主観をこの主観がそれ自体であるところのものに従って認識するのではなくて、これを現象としてのみ認識するのだ」、とカントが言っているのを見ました。チャーマーズさんは、この判断を超えて、現象としてしか知りえない意識自体の存在を議論するのです。これに対し永井さんは、議論を尽くして、意識自体は実

在する種類のものではないと結論します。永井さんは経験から超越しないので、カントの言明と矛盾しません。この辺の事情は、「対象を思惟することと対象を認識することは同じでない」や「カテゴリーが物の認識に使用されるのは物が可能的経験の対象と見なされる場合だけに限る」というカントの指摘に関係していると思います。

わたしは手足に触ってそれを動かすことができ、鏡で自分の顔を見て表情を変えることができ、身体は経験の対象となる物です。他方の意識（意志）はその身体を動かすのですが、身体のような物的対象とは異なります。その意識を、物である身体と同じ仕方でも認識することはできない、とカントは言っているのだと思います。この言い方は素朴すぎるでしょうか。でも、哲学者の永井さんが、意識は実在する種類のものではないと応援してくれるのです。僕の意識についての理解はこういうもので、カントの認識論に沿っていると考えます。

庄周 この際、君は、君のその意識論を堅持しておくのがよいでしょう。

園丁 はい。二千五百年前にゴータマ・シッダールタは、自我 \parallel アトマンが存在するかどうかという問いに答えないという態度で、経験世界と異質の心が存在するという論から離れました。二百数十年前にカントは、近代的な認識論を確立して人間の経験世界に対する向きあい方に基礎を据えました。僕の言う唯物論はこの偉大な思想に沿うものだ

と考えます。

園丁 さて、カントは人間の理性を整序することに努めました。けれども理性は、その本性からでしょう、その働き全体を了解することはできず、実践的な根拠は形式的にしかとらえることができませんでした。そして、いざ世界を観察して認識しようとするときにも、認識作用はどこまでも果てしなく続くという現実があります。

荘周 また考えだしましたね。何を話そうとしているのですか？。

園丁 精確に言いとめることに失敗するかもしれませんが、言ってみます。永井さんが「わたしは、わたしつまりわたしの心しか知らない」と言っている問題です。そのわたしをとらえようとすると、現象的なものと心理的なものの対比となつて、人間はその対比においてしかわたしを理解できないというのです。意識にとどまっているときはその分節はないとしても、意識を意識しようとするればその対比になつてしまふというのです。人間ができるのはこの累積的な思考の重ね行きだけである、ということになります。永井さんは、認識作用の果てしなさがその累積的な構造にあると考えているのでしょうか。

つまるところ、わたしの心は、数学に出る特異点のようなものだということになります。そこで他者を考えると、そんな特異点である他者について、心があるかどうかさえ

わたしに知ることができるか疑問になります。「私を感じているのは私の心だけです。しかし《自分》なんて一般的なものの存在はまったく知りません」という言明は、他者を知ることなどできないという表明でもあるのです。「我思う」をこのように先鋭にとらえるのが永井さんの立場です。カントの認識論に素直には従わない立場に見えます。あるいは、他者をこのようにとらえれば、間主観的に客観を認識するというような議論にも進めませんね。永井さんは、竹田さんの言う「社会問題のうちに、普遍的なもの根拠を見出そうとする試み」を評価しないでしょうね。僕は、永井さんの哲学をどう受けとめればよいのかとまどっています。突き刺さったとげとしてありますが、どうしたものでしょう？。

莊周 その問題にはわたしも対応できません。数学をかじったことはありませんか。特異点を留数で処理する方法があるのでないですか。君の奮闘を期待します。

園丁 茶化さないください、莊周さん。困ったものだ……